

論 説

限界集落における孤立高齢者への生活支援（下）

田中きよむ・玉里恵美子・霜田博史・水谷利亮

目 次

- 第1章 高知県大豊町における高齢者生活支援
- I 大豊町の概要
 - II 集落の状況
 - III 行政支援の特徴
 - IV 財政状況
 - V 大豊町社会福祉協議会の取り組み
 - VI 生活問題と支援－西峰地区の事例－
 - VII 大豊町の積極面と今後の課題 …以上、前々稿（上）
- 第2章 高知県仁淀川町における高齢者生活支援
- I 仁淀川町の概要
 - II 少数世帯集落における高齢者の生活実態と支援課題
 - III 行政支援の特徴
 - IV 財政状況
 - V 高齢者生産活動センターの取り組み
 - VI 仁淀川町社会福祉協議会の取り組み
 - VII 仁淀川町の積極面と今後の課題
- 第3章 長野県阿智村における高齢者生活支援
- I 阿智村の概要
 - II 行政支援の特徴
 - III 阿智村社会福祉協議会の取り組み
 - IV 阿智村内集落における生活課題と取り組み－住民聞き取り調査をふまえて－
 - V 今後の課題 …以上、前稿（中）
- 第4章 高知県内の少数世帯集落における高齢者の生活実態と支援課題
- I 香美市物部町
 - II 中土佐町大野見地区
 - III 小括
- 第5章 高知県内における地区単位を中心とする高齢者の生活支援の方向
- I 中土佐町大野見北地区振興会の取り組み
 - II 北川村の取り組み

Ⅲ 土佐町相川地区の取り組み

Ⅳ 小括

…以上, 本稿 (下)

第6章 限界集落における高齢者の支援システム

I 行政システム

II 財政システム

Ⅲ 地域社会システム

Ⅳ 地域福祉システム

…以上, 次稿 (完)

はじめに

本研究は、過疎・中山間地域で高齢化率50%を越えた「限界集落」や「限界自治体」に関する以下の3点を目的として取り組んできた。

- ① 高齢者などの孤立化した地域に住む住民・世帯が抱える介護（予防）・保健福祉・医療ニーズ、家族との関係、仕事と収入、住居、近所づきあい、移動・交通、生きがい・趣味、地域福祉活動、地域生活の継続などに関する生活実態と支援課題を面接調査等により総合的に調査・分析する。
- ② それらの多面的な生活支援課題に対する地域・コミュニティや社会福祉協議会・NPO、市町村・県など、地域福祉と行財政施策の両面での具体的な支援のあり方や方法を実態調査に基づいて明らかにする。
- ③ ①と②を総合化しつつ、過疎地域・限界集落の「維持可能な社会」のあり方を考察し、支援モデルを構築する。

とりわけ、③に向けた作業を進めるために、②として、高知県大豊町（前々稿・上）、高知県仁淀川町および長野県阿智村（前稿・中）を調査対象として取り上げ、高齢者の地域生活支援に向けた行政支援と地域支援のあり方を考察するための基礎作業を進めてきた。

本稿では、さらに、香美市物部町と中土佐町大野見地区の少数世帯集落における高齢者の生活実態追調査をふまえ、住民に最も身近な地区単位を中心とする高齢者の生活支援の方向を明らかにするために、中土佐町大野見北地区振興会の地域づくり、高知県北川村における高齢者の見守り活動や「あったかふれ

あいセンター」の取り組み、高知県土佐町相川地区の若い世代をも巻き込んだ地域づくりの特徴分析をおこなう。それらをふまえて、次稿では、限界集落で地域的に孤立した高齢者の生活支援システムのあり方を考察し、持続可能な生活に向けた総合的な支援モデルの方向を提示する予定である。

なお、本研究は、平成20～22年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）課題番号20530526、研究課題名「限界集落における高齢者の孤立問題と行政・地域社会の支援機能に関する実証分析」による研究成果の一部であり、田中きよむ（研究代表者、高知県立大学社会福祉学部教授）、玉里恵美子（高知大学総合教育センター准教授）、霜田博史（高知大学人文学部准教授）、水谷利亮（高知短期大学社会科学科准教授（当時、現・下関市立大学経済学部教授））の共同研究である。本稿の執筆分担は、田中きよむ（はじめに、第4章Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、第5章Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、おわりに）、霜田博史（第4章Ⅰ・Ⅱ、第5章Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）である。

第4章 高知県内の少数世帯集落における高齢者の生活実態と支援課題

本章では、2008、2009年度に続く追調査として、限界集落における高齢者の生活実態と支援課題を明らかにする目的でおこなった調査結果を示す。3つの市町村・地域を対象にして、今回はとくに数世帯に減少してきている世帯を行政や社会福祉協議会の協力を得ながら抽出し、個別訪問調査をおこなった。

調査項目は、インタビューガイドに則して、集落の生活状況（世帯や地理的特徴、家族との関係、就労や居住環境、移動状況やライフライン、福祉・医療サービス等の利用状況、通信、鳥獣被害など）、集落の活動（地域の役員等、共同作業、近所づきあいや支えあい活動）、暮らしのうえでの悩みや楽しいこと、地域に住み続ける思い、そのために行政に求めることや地域でできること、集落の今後、等について、半構造化面接をおこなった。

I 香美市物部町

香美市物部町内のA集落（3世帯集落）とB集落（2世帯集落）から聞き取り調査をおこなった（2010年8月19日）。以下に、その調査結果を示す。

(1) A集落

聞き取り対象：Aさん（男性60代）、Bさん（女性80代）

この集落では、3世帯3人（独居）であり、Aさん、Bさん以外に、もう一人（60歳くらい）が暮らしている。昔は13世帯あった。

市から補助事業を受けるためにAさんが区長になっている。Aさんには家族はいない。香美市内の町外に姪がいる。移動にはトラックとスクーターを利用している。

Bさんは、送迎つきのリハビリに通っている。月に一回、眼科に行くが、往きはバス停まで1km弱、20分ほど歩いてバスに乗る。歩いて帰るのは大変なので、夏にはあまり外に出ない。できるだけ送迎のバスを利用するようにしている。帰りは子が乗せてくれたりということもある。香美市内の町外に娘さん夫婦がいる。孫をお盆に連れ帰ってきてくれる。

集会所など、公的施設は以前からない。集まりがある時は区長の家を利用している。水は谷から引いてくる。今はまとめて引いているが、以前は個人で引いていた。水源が枯れることはないが、水源が遠いのが難点である。電気は、台風が来たとしても今は止まることはない。電話は、固定・携帯の両方が使える。

鳥獣被害については、鹿、猪、ハクビシンが出る。柵を作るために、農水省の補助を元に市が上限5万円の補助をしてくれる。柵を作ることで多少、鳥獣被害が緩和された。ネットに鹿が絡まったりすると、耳だけ役場に持っていく。そうするとお金になる。残りは欲しい人にあげたり、犬のえさにする。近くの温泉では、鹿を取ってから2時間以内に持っていかないと買い取ってくれない。

Aさんは田・畑をやっている。全部で1丁ほど、個人で売りに出している。メインはゆずを出している。Bさんも家庭菜園を約3畝ほどの広さでやっており、夏は暑いのでやらないが、涼しくなってきたら始める（大根、トマト、ゴーヤなど多種類作るが、自家消費用である）。

ごみの収集は、缶だけは出しているが、分別ゴミは県道まで持っていかないといけない。その他は燃やしたり畑処理している。収集車が集落まで来てくれない。地すべりは、下の方は悪いが、どうしようもない。

買い物は、Aさんは、週に1回は市内の別の町まで出て行く。町内では、あまり買い物はしない。町内で買う時は、保存できるものを買う。Bさんは、子（市内の町外にいる娘）が買ってきてくれる。その他、リハビリに送迎バスで出て行く時、病院に行く時などについでに済ませる。送迎バスは朝に出て行くので、帰りに時間があれば町外で買い物を済ませる。県道までは移動スーパーが着てくれるが、ここまでは上がってくれない。

もう一人との付き合いは、1kmほど離れているのであまり会わない。民生委員が見ているのではないか。民生委員は、この地区ともう一つの地区を一人が担当しており、75歳以上の独居高齢者を見ているが、来るか来ないかという程度である。役場の人は、2ヶ月に1回来る程度である。保健師は時々来ていたが、今はあまり来ない。社協からは印刷物が来るぐらいである。

集落の活動は、3人で集まってやることはほとんどない。氏神様の掃除（11月）は3人でやる。集落外から氏子として来てくれる人もいる。神祭は秋だけにおこなう。世帯数の減少でお金を出せなくなったので、神官さんは呼んでいない。道の草刈などは、個人でやっており、家の周りではできるが、その他は難しい。そうはいつでも、いろんなことを自分たちだけでやらなければならない。AさんとBさんが直接会うペースは必要な時であり、それ以外は電話で済ませている。

心配なことは、今はあまりない。火の心配ができる限りは、この地区を出て行きたいとは思わない。将来のために、林道を伸ばしてつなぐことはしておきたいが、地元を出た土地所有者が土地を提供してくれない。

3人になって寂しいと思うことは特にない。慣れてるから。むしろ、怖いのは知らない人であり、都会にいるほうが大変だと思う。以前風呂屋をしていた人がいたのでバス停の名前が「温泉前」になっている。それを見て道を間違ってくる人もたまにいる。

頼りにしている人は、Aさんは市内町外にいる姪であり、Bさんは市内町外

図表1 香美市物部地区調査 ①



図表2 香美市物部地区調査 ②



にいる娘である。子はもう、この集落には帰ってこないのではないかと考えている。楽しいことは、Bさんはテレビを見ることであるが、地デジの関係でアンテナ工事がある。

この地域に住み続けたいという思いはある。病気・介護が必要になったら、その時に考える。Bさんは、子に面倒をかけたくないので、病院に行きたいと思っている。今はまだ介護認定を受けているわけではない。一人暮らしになって

6年くらいである。Aさんは、市内町外の病院に通院しているという状況である。

行政に求めることとしては、道を舗装する原材料を求めたことがあった（行政は舗装してくれない）。

合併した影響は、今のところ特に感じない。将来は行政機能が縮小してゆくだろうと思っている。今のところは市が小集落に対して努力してくれており、支所が残っているという意味は大きい。

3人で今後できることは、もうない。水源も人に頼んでみられている。隣の集落との間では、中山間地の協定を組んでおり（道の管理を一緒にやったりもしている）、個人的な支えあいの関係はある。集落再編（合併）はないだろうし、こちらは小さいので組み入れてもらえないだろう。一緒になるには、移住するしかない。2人とも国民年金なので、高齢者住宅に入るにも負担が大きい。敬老会はやっていない。

(2) B集落

1) Cさん（男性、70代独居、2世帯のうちの1世帯）

集落の状況は、現在2世帯であるが、多い時は6世帯くらい（昭和50年代くらいまで）、最も多い昔は13世帯あった。区長はいない。物部支所まで車で1時間、安芸市までも車で1時間の距離にある。

生活状況としては、車は運転しないのでタクシーを使う。支所まで1回往復1万5～6千円かかる。買い物は安芸市です（月1～2回）。病院は香美市内の別の町に行く（月1回）。収入は国民年金のみである。

もともと集落で畑作をしていた。林業関係の仕事もやっていた。水は特に困っておらず、山から一軒ごとに引いている。水源は山のほうへ300mくらいのところにあり、自分で見に行く。台風時に電気が停まることはあるが、直してもらえる。電話は固定電話のみであり、携帯電話は通じない。

鳥獣被害としては、猿や鹿が来る。農業は、自家消費用の野菜を作っている（菜っ葉、大根、きゅうりなど）が、自給できるほどではない。ごみは、ある程度ためて自分で焼くか、缶類は埋める。収集には来てくれない。落石や地滑りがあるが、道路の土砂崩れがあると困る。

家族の状況としては、ひとり暮らしであり、子どもはいない。兄弟が一人、物部町内にいるので、正月、盆暮れに会う。呼んだら来てくれる。

民生委員は来ないし、そもそもいま誰がやっているのかははっきりしない。社協からは広報が来る。新聞はとらない。役場からは、2月までは毎月来ていたが（保健師と地区担当が一緒に来る）、3月から来てくれなくなった。

もうひとつの世帯のBさんとの関係は、親戚ではない。交流はよくある。一緒に買い物に行ったりする。直接顔を合わせるのは週に一回くらい。電話はする。

楽しみにしていることは特にないが、テレビを見ること（地デジ対応済み）くらいである。情報源は社協の広報とテレビ、新聞などである。

生活に困っていることは、移動の問題である。車がないと移動が難しい。住居や草刈り等については今のところ何とかなっている。健康については、月1回通院しているが、病院は市内の別の町に行けば間に合っている。畑仕事は楽しいということではない。ふだんはよいが、台風の際は多少不安があり、寂しくなる。

この土地には、先祖から300年くらい、自分も生まれてからずっといる。元氣なうちは居続けたいが、長くはいられないかもしれない。頼りになるのは兄弟であり、親戚になるとやや疎遠になる。昔、一緒に仕事をしていた時の友人（二人）が一番大事である。そのうちの一人とは電話連絡しているし、もう一人は会いに来てくれる。

集落の活動としては、神祭は二人でおこなう。神社の掃除と果物のお供えであり、正月、6月、9月の年3回おこなう。他の集落と一緒にすることはない。近くの集落としては2集落（そのうちの1つは一人集落）があるが、安芸市内の地区の方が近いような状況なので、距離的にも遠い。

この地域で暮らし続けるために行政に期待することとしては、移動の問題が大きい。もともと車に乗っておらず、免許もない（県外に林業で出稼ぎしていた関係などで、これまで特に必要性がなかった）。合併の影響は特に感じない（われわれにとっては同じ）。

集落の今後については、どうしようもない、二人がいなくなったら終わりだろう。この地区にいて、寂しいという感覚はあまりない。

図表3 香美市物部地区調査 ③



図表4 香美市物部地区調査 ④



2) Dさん（男性，80代独居，2世帯のうちの1世帯）

生活状況としては，耳が遠く，障害者手帳を申請しようと思っている（現在，安芸市の病院に通っている）が，申請方法がわからない。

家族の状況としては，ひとり暮らしであり，息子(50代)が別の市にいて，週1回シキビを取りに来る。娘も別の市におり，正月・彼岸に墓参りに来るし，その他でもたまに来る。

農作業はシキビを採るのを手伝ったりすることくらいである。野菜も作って

いるが、鹿による被害がある。秋には大根や白菜を作っている。生活収入は国民年金のみである。買い物は月3回くらい、安芸市内で買い物をする。町内では店がなくなってきたし、距離はあるが安芸のほうが道が良く、行きやすい。役場本所まで車で片道1時間半かかる（通常の用事は町内の支所まで、特別の場合は本所まで行く）。移動は自家用車で行くが、運転することに不安はまだない。

一番困っていることは道のことであり、雨が降ると通れなくなる（復旧に1週間くらいかかる）。草刈りは自分で家の回りをしている。ごみも困っている。焼ける物はいいが、ビンと缶の処理に困る。自分の土地にまとめて捨てている。

民生委員は一年に数回来る。役場の人（保健師）はたまに来てくれる。保健師もたまに来る。Cさんとの関係は、二人しかいないので、どちらかが欠けたら難しい。心細いということはないが、地震の時は困るかもしれない。緊急の時は子どもに連絡するが、来るのに1時間くらいかかる。役場に連絡する用意もしている。ただ、電話をする時は補聴器では聞こえにくいので困る。

将来、息子のところへ行く可能性は、寝たきりになったらあるかもしれない。あるいは施設に行くかもしれない。一番頼りにしているのは息子だが、息子の妻は亡くなっており、一緒に住むのは、仕事勤めがあるので、食事の面で難しいと思う。今は、自炊している。

楽しみは特にない。魚釣りや狩猟等をしていたこともあったが、今はしていない。テレビはよく見る。住居に関して、もう古くはなっているが、自分で天井の雨漏りは直した。トイレについては、くみ取りを自分でやっている（山に運ぶ）。風呂は困っていない。新聞は取っていない。郵便局は、町内から安芸に管轄が変わった。

畑作業は、鹿と猿に食べられてしまうので、夏は作らない。秋になれば作る（大根、白菜など）が、全て自家消費用である。

元気なうちは、この集落に暮らし続けたい。今から、街に下りていっても、別の地域の高齢者となじむのは難しい。山と街では生活習慣が違うし、自分は酒を飲まないから付き合いも難しい。他の集落とは、離れすぎていて会うこともあまりない。

合併してからの変化は、得になったことはなく、次第に捨てられたような感じになっている。選挙が地区できなくなったので、支所まで行っている。

行政に期待することは、無理を言うと迷惑になりそうで言えないが、道路の管理は何とかして欲しい（道路が通行できるよう、捨てないでほしい）。

集落はなくなると思うが、800年の昔から続く寺が二つあるので、その保管が心配であり、自治体で保管してほしい。

II 中土佐町大野見地区

中土佐町大野見地区内のC集落（16世帯集落）、D集落（1世帯集落）、E集落（3世帯集落）、F集落（3世帯集落）から聞き取り調査をおこなった（2010年9月3日）。以下に、その調査結果を示す。

(1) C集落

聞き取り対象：Eさん（70代男性、夫婦世帯、16世帯集落のうちの1世帯）

小学校・中学校ともに大野見に通っていた。C集落には結婚で昭和30年代に来た（当時は、30世帯くらいあった）。家族構成は、妻（自営）と二人暮らしである。子どもが三人おり、県外に二人、県内他市に一人住んでいるが、県内在住の娘は盆休みにやってくる。子どもが戻ってくることはないだろう。

仕事は役場で公務員をしていたが、それ以降は農業をやっており（全て自家消費用）、稲作の他、畑ではカボチャ、ナス、きゅうり、ピーマン、ししとうなどを作っている。その他の買い物は、地区外や町内です。車の運転をするので、高知市内まで出ることもある。

集落の状況は、現在16世帯であり、大野見北地区（5集落）では、最も世帯数が少ない集落である。大野見庁舎まで車で5分、中土佐庁舎までは車で20分の距離にある。公共共通として、バス（K観光）が来ている。高齢者には補助を出す方向で町長が検討している。以前は別のバス会社からも来っていたが、今は来なくなった。タクシー業者は大野見村地区内にはない。

水道は、町営の簡易水道を利用しており、管理は町が全部してくれる。電話は、固定、携帯の両方使う。鳥獣被害は、いのししが出る。トタンなどで囲っ

たりという対策で、かなり防げている。ごみの収集は、町から週に一回取りに来てくれる。昔の南海地震を小学生の時に経験したことがある。地震の心配は、北地区振興会が自主防災組織も兼ねている。

買い物は、果物屋や生協の移動スーパーもある。Eさん夫妻は、車があるので買い物の不便は今のところない。

地域の活動については、Eさんは、地域全体の見守り活動、声かけを目的とした防犯パトロール「青パト」を3人くらいでやっている。車に放送器具がついていて、振り込め詐欺など、録音音源で防犯を呼びかけている。窃盗があったので、夜の「青パト」活動をやる時がある。防犯活動は、北地区の「安心部会」(ひとり暮らしの見守りをする)が行なっている。その他、「案練り部会」(企画担当)、あすなろ部会(研修などを担当)の部会がある(第5章I(3)を参照)。

民生委員は時々来る。C集落を含む二つの集落を民生委員が一人で担当している。「安心部会」とは別に、北地区振興会の役員会から推薦された「見まわり支援員」がおり(北地区で20人)、昼夜に声かけをする。近所づきあいという点では、C集落はまとまりがあるが、北地区全体では孤立している人もいるようである。

共同でやっていることとしては、Eさんは老人クラブの地区代表であり、花の

図表5 中土佐町大野見地区調査 ①



手入れ、県道沿いの草刈り、視察研修などを行っている。老人クラブは二つの集落だけで構成し、会員数35名であるが、役員のなり手がなくて困っている（任期は2年）。神祭は夏・秋の2回おこなっている。

集落に小中学生はいるが、大野見小・中学校まで通っている。緊急時の支えあいとしては、「とうま組」という仕組みがあり、葬式や火葬場に行くまでの準備をみんなでやる。Iターンの受け入れは、積極的というほどではないが（現在は1名）、北地区としては受け入れる意思は比較的ある。しかし、家主が貸してもよいと言っている物件が一つしかない。空き家は多いが、年に1～2回帰ってくるから、貸すための片づけが面倒、などの理由で貸すのが難しい。婦人会に、「森の宮を守る会」というのがあり、いろんなボランティアをやっている。

Eさんの暮らしについては、住居で不便なことは特にない。情報は、新聞、テレビなどから得ている。農業だけでは食べられない。兼業が必要であるが、米だけで生活するなら、最低7丁の田を作る必要がある。自分の農地をいつまでも維持できないので、手放すことなどを考えざるをえない。中土佐町内で兼業でやってくれる人がいればよいのだが。午前中は仕事、午後は老人クラブのゲートボールやグランドゴルフをやったりする。5人のチームであるが、全部で10人くらい集まる。

健康面で今は特に困っていることはない。血圧の薬は飲んでいるが、80歳くらいまでは特に困ることはないのではないかと考えている。80歳を過ぎれば、運転の不安が出てくるだろう。集落は、一人亡くなれば一軒なくなっていく、というような状態であり、一世帯だけ、子どもが三人いる（北地区の中で、C集落は最も高齢化率が高い）。困った時は、隣の人との付き合いで何とかする。

ここで住み続けたいという気持ちはあるが、県内の別の市のマンションに出資して確保してある。集落の今後に関して、行政への期待は、特にない。地域で取り組んでいかなければならないと思うことは、地域の人が声を掛け合って、相互に支えあっていくことである。地域の今後については、UターンやIターンでも良いし、若い人が入ってこれるようになってほしい。仕事場を作り、受け入れ体制づくりを進めていく必要がある。北地区振興会ができているので、

他の集落との関係・協力は比較的できている。ある集落は男性の一人暮らしが何人かおり、少し心配だ。なかなか老人クラブにも入ってくれない。

集落がなくなることへの不安はある。若者が増えるような集落になってほしい。旧・中土佐町との合併については、合併してよかったと思っている。旧・大野見村だけではやっていけないから。合併して不便になったという感覚はない。集落がなくなることへの不安はある。

(2) D集落

聞き取り対象：Fさん夫妻（50代男性Fさん，60代女性Gさん，1世帯集落）

Fさんは県外生まれ，職業は画家であり，普段は工場へ働きに出ている。Gさんは，元看護師であったが，今は働いていない。絵を描くことが趣味である。子どもはいない。1990年代後半にD集落へ移住してきた。緑の多いところで創作活動がしたいと思っていたところ，友人に四万十川流域を勧められた。当時の大野見村長が誘ってくれた。最初は借家だったが，今の場所を改築して引っ越した。来る時には集落には誰もいなかった。もともと住んでいた人が出て行くというので，譲ってもらった。まわりの田は，元の持ち主の長男さんが作っている。

車は二台，Fさん，Gさんがそれぞれもっている。公共交通機関は来ていない。買い物は，小さいものは大野見の地区内で，買い出しは地区外，町外に行く。水は川向こうの谷川から自分で引いたため，維持管理の必要がある。そのためにトロッコを作ったが，今後，川を渡って維持管理できるかどうか，この地区でやっていけるかどうかの分かれ目になる。

固定電話を利用しており，携帯は圏外である。道の舗装が1年前までされていなかった。畑は作っていたが，ここ1～2年でいのししが出るようになった。Fさんは，ふだんはミシン加工のアルバイトをしている。ごみの処理は，車で10～15分のところにある集落付近にごみ収集場がある。

災害に対する不安がある。ある程度下準備しているが，台風が来る時には役場から注意が来たりする。落石がある場合，危険地区に指定されていないため，陸の孤島になる。豪雨の後，落石の危険が高まる。電気が台風で一日切れたこともある。

絵画を描くには、環境としては悪くない。Fさんはイメージを描き、Gさんは風景を描く。近所付き合いは、距離的に離れているので難しい。奥のほうに田畑がある山師の人が仕事で毎日来て、あいさつしてくれる。県外の友人が来たりもする。県内の他市町村にも絵画関係の友人がいる。寂しいということはないが、冠婚葬祭など個人的な情報がなかなか入ってこない。町の広報は郵便で来る。1軒しかないので、集落の区長になっている。

過疎を放っておかず、人口分布をもう少しバランスよくしてほしい。Iターンしてくれるとうれしいし、町も潤う。Iターンで来た以上は帰れない。県外で震災経験があるので、住む場所は三つくらいある方がよいのではないかという思いがある。親族は、県外に多く残っていて、何かあれば交流はある。

困っていることは、体力の限界があるかどうか。まだはっきり分からないが、体力が持てば、ここで暮らし続けたい。創作活動の環境、販路については特別困らない。土地の広さがあるし、灯油窯を作ったので焼き物もできる。道路の整備については不満がある。便利にはなったが、もともと自然のままがよいと思っていたので。困った時に頼る人は、山師さん、別の集落にいる友人、民生委員である。

生活の楽しみは、絵を描くことである。地域の今後としては、ホスピスなどをつくったりして、都会から政策的に人を呼び寄せるようにして欲しい。それによって給食サービス、交通、一人ぐらしが集まるシステムづくりなどができていくだろう。

合併前後の変化はかなりある。職員が旧中土佐町の方へ移ったことで飲食店等の利用が低下した。活気あるものが遠くへ行くことにより、絵画の仕事にも影響が出てくる。地域の人とのつながりが希薄になり、保健師も来なくなる。

(3) E集落

聞き取り対象：Hさん（70代男性、3世帯集落の1世帯）

E集落は現在3世帯8人が住んでいる。Hさんが来た45～46年前は、12世帯あった。Hさんは、父の仕事の関係で引っ越してきたが、夫婦2人で生活している。子どもは利便性が悪いという理由で転出し町外に住んでいる。県内だけ

ら月に2～3回やってくるが、集落に戻ってくることはないと思う。

集落・生活の状況としては、車で移動している。移動、水、電気に関して特に困っていない。携帯は通じない。仕事は農林業で、稲作と生姜づくりをしている。鹿、猪、ハクビシンによる茄子、梨、柿の鳥獣被害が大きい。対策はしているが大変な状況にある。

ごみ収集はこない。自分で下のほうへ持っていく。災害は特に不安ない。買い物は、時間があれば町外へ出かけるが、特に困っていない。民生委員は来ない。この集落の最高齢は80歳であり、送迎付きのデイサービスを利用している。

困っていることは、今のところ特にない。孤立している人は、特にいない。下の集落の人とも、よく顔を合わせる。むしろ、大野見の人であれば大体知っている。

集落で共同してやっていることとしては、別の集落の一部と合わせて2集落8世帯で水路管理、生活道の草刈りを含め、農業の助け合いをおこなっている。E集落から2世帯、別の集落から6世帯参加している。神祭は夏、秋の2回、この集落2世帯でやっている。その他、春に龍王様のお祭りを、2集落共同でやっている。近所づきあいは、集落内、集落間ともによい。たいてい毎日、誰かと会う。祝い事も、集落内や集落間でおこなっている。集落としては独立して、協力する方向で行きたい。以前からずっと、集落間で協力してきた。

集落の今後について、寂しさはとくに感じない。逆に、楽しさもとくに感じない。足腰が立つ限り、ここで暮らし続けたいが、断言はできない。安心して暮らし続けるためには、道は自分たちで開いたので、復旧工事を続けてほしい。この集落は今後、人口はとくに増えないだろう。市町村合併による変化は、所帯（自治体の規模）が大きくなると、陽の当たらない所も出てきた。実際、広くなったので、道の補修がすぐには対応できなくなった。5年単位、8世帯単位で中山間地域直接支払い制度をやっている。5年後には83歳という人もいるが、若い人もいるので、助け合い、限界も含めて、話し合っていきたい。農地を荒らさないようにするため、共同で農作業をすることも考えている。ただ、年齢的に5年後も続けられるかどうか。自分の所を置いておいて、他の人の所に行けるほど余裕がない。

図表6 中土佐町大野見地区調査 ②



(4) F集落

聞き取り対象：Iさん（90代男性，3世帯集落の1世帯）

大野見地区の近年の出生児数は年間一桁台が多く，死亡者数は20～30人台で推移している。昭和30年代に比べ最近1～2年は，小中学生の人口は10分の1以下，人口は2分の1以下に減少してきている。

「寂しくなった」，「どうなるだろう（消えやしないか）」ということが，老人会でいつも話題になる。行事をやるにしても，村人（旧大野見村）の心がバラバラになった。田役等，仲良くしないといけない。農業が機械化してから変わった。住みにくくなったから，人が減った。30年前までは林業で成り立っていたが，外材，外米の影響で農林業が衰退した。稲作は耕耘機，刈り取り機を購入しなければならないが，大野見は平均7～8反だと思う。

野菜は，甘藷，たいも，かぼちゃ，春菊，大根，キャベツ，白菜，ブロッコリーなど，自家消費用として作っている。子どもや孫に送るのが楽しみで作っている。畑は約20アール（2反）で，体力がなくなると，1時間くらいの作業になるが，やがてできなくなるだろう。県内の子どもは週1回くらいやって来るが，県外の子は年2回くらいである。妻は他市で入院しており，娘が見舞いに

行っている。子どもが帰る可能性はないと思う。

ここに住んで20年だが、それまでは隣の集落に住んでいた。畑も自宅周辺と隣の集落にある。役場までは車で15～20分、支所までは5分であり、自分で車を運転している。病院に行ったことはない。買い物は、生活用品や肥料など、大野見地区内の農協でほとんど済ませられる。ホームセンターやスーパーは地区外まで行けばあるが、不安がある。

この集落は、多い時は10軒くらいあった。バスは役場までであり、あとの2世帯も車で移動している。水は完全水道であり、電話は固定式を使っている。鹿、猪、ハクビシン、カラスの鳥獣被害に遭う。鹿、猪、ハクビシンは、囲めば被害を防げるが（柵設置の補助あり）、カラスの被害は防げない。ゴミ収集は週1回ある。災害不安はない。個人商店の移動スーパーがある。

地区長は毎年交代するので、3年に1回、回ってくる。民生委員はいるが、来ていない。保健師も来ない。趣味は、漢詩や万葉集など、文化的な本を読むことである。昔は小中学校の教員だった。大きな出来事はない。

困っていることはほとんどない。要望もとくにないが、散髪屋がなくなった（月2回、役場の診療所に出張してくるが）。うどん屋、そば屋、居酒屋はなく

図表7 中土佐町大野見地区調査 ③



なった。友人は亡くなった。隣近所とは週1回程度会う。神祭は年3回やっており、地区の一斉清掃もある。緊急時は娘に連絡するが、迷惑をかけたくない。

地域の将来は怖い。集落共同事業は、昔であれば一緒にやれたが、神様も異なるし、その集落も自分の集落を欲しがらない。住民と役場支所の関係は不便になったし、地区外から職員が来ても誰かわからない。合併後は役場の距離が遠くなり、合併して良かったことはない。

大野見地区には小学校が一つになったが、寂れる。しっかりとした教師と教育委員会がいれば、地区外に子どもを通学させる親は少ないだろう。子どもが少なくなったことは寂しく感じる。近くのコーヒー店に人が来ない。

自分はここで暮らし続けたいし、子の所には行かない。自分の体の健康を保ち、自動車に気をつけていれば不安はない。

Ⅲ 小括

香美市物部町と中土佐町大野見地区の少数世帯集落における高齢者の生活実態調査から浮かび上がる特徴が見られる。

高齢者の多くは国民年金と自家消費用の農作物で生計を立てている。しかし、農作物は鳥獣被害を受けることが多い。ごみ収集車や移動スーパーが来てもらえない地域もある。

タクシー費用の問題、自家用車運転の不安、公共交通の欠如など、移動の問題が生活困難をもたらしている地域もある。

子どもとは離れて暮らし、時折の交流はあっても、子どもが地域に戻り住むことはないと考えられている。近隣づきあいが地理的に難しい地域もあり、民生委員が二つの地域を担当していたり、民生委員、役場職員、保健師、社会福祉協議会職員といったキーパーソンがほとんど姿を見せない地域もある。水の維持管理や道路の整備・管理など、住民の自助、共助だけでは困難な生活課題も浮かび上がっている。

そのような地域的な孤立化が浮かび上がる反面、居住期間が長く、その地域生活に慣れていることもあり、寂しさを感じることはあまりない。ただし、特別の楽しさも感じていないという様子が見えがえた。高齢者は、元気なうちは

できる限り、生まれ育った今の地域に住み続けたいと考えているが、介護や入院治療が必要になれば、子どもへの気遣いもあり、施設や病院を次善的な選択肢として視野に入れている。地震、落石、台風などの災害への不安を表明する人もいる。

市町村合併による影響を感じていない人がいる反面、役場との関係が不便になったり、取り残されたり、役場との距離が遠くなったと感じている人もいる。集落自体の存続には悲観的な見通しや不安をもちながら、集落間の再編は難しく、共同事業などで協力できる部分は協力してゆこうと考えられている。また、防犯パトロールや声かけ、神祭、葬祭など、住民どうしで支え合えるところは支えあっていこうとする姿勢や、他地域から若い世代などの移住を受け入れようとする姿勢も見られる。

第5章 高知県内における地区単位を中心とする高齢者の生活支援の方向

I 中土佐町大野見北地区振興会の取り組み

(1) 大野見北地区振興会について

限界集落における高齢者の生活支援の方向を考えるうえで、中土佐町大野見地区において住民主体の地域づくりに取り組んでいる大野見北地区振興会に聞き取り調査をおこなった（2011年2月15日）。以下に、その結果を示す。

2006年1月に中土佐町と大野見村が合併、行政の中心が中土佐に移ったことで、行政サービス低下の心配が出てきた。行政からも心配の声が出ていた。とりあえず、自分たちで何とかしないと、ということになった。

2006年4月から、行政主導で住民の話し合いを始め、徐々に住民主体の活動に変わっていった。世話人会をつくり、2007年4月に住民自治組織を立ち上げた。北地区の住民は全員加入しているが、活動が地域全体の総意ということにはなかなかならない。

合併協議会の中で、新町で6つの自治組織をつくるという協定内容があった。しかし、まだ北地区しかできていない。県下にもないだろう。他の地区も、必

要性は認めているが、組織にはなっていない。地方自治法や町の条例など法的根拠はなく、住民の自主的な自治組織ということである。それで、町の財政的支援が受けられず、他の地区に広がらない要因になっているのかもしれない。

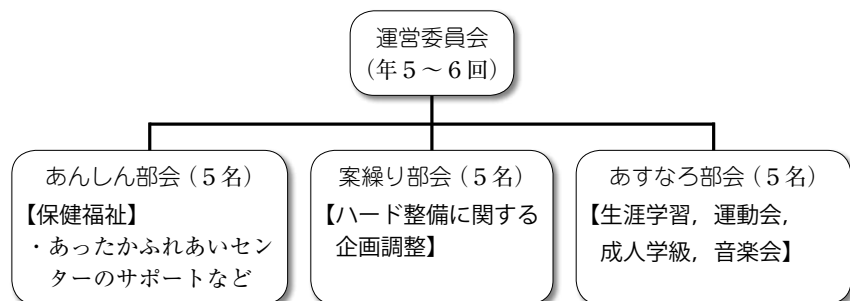
活動資金は、①行政からの委託事業（町道の除草、選挙ポスターの掲示板管理、体育館の管理、旧小学校全体の管理、小学校があった時は給食配達の委託も受けていた）、②県社協の補助金（高齢者の生活支援事業であるが、要綱に沿った使い方が決められているので、制約になり負担になる部分もある）、③運動会開催に対する補助（町から5万円、近くにある企業からも寄付がある）、となっている。その他、中土佐町社協の職員（今はあったかふれあいセンターの職員）が事務局に入ってくれている。

北地区振興会の状況と運営体制としては、現在180世帯（加入率100%）、390人（高齢化率が約53%）となっている。スタート時は190世帯420人いたが、自然減が続いている。

会費はとらず、運動会の時のみ1軒1000円の負担としている。運営委員会の組織構成は15名であり、内訳は、地域選出5名、会長委嘱5名、地区長5名となっている。全体的なことについては、運営委員会が年6～7回開催される。

部会には、運営委員15名が5名づつに分かれて所属する。部会の構成員は、地区割ではなく適材適所で決めている。部会にはなっていないが、女性部もある。

図表8 運営委員会の構成



（出所）大野見北地区振興会での聞き取り調査より筆者作成

(2) あったかふれあいセンター（サテライト型）について

北地区小学校の空き校舎を活用して、あったかふれあいセンター（高知型福祉として、県下全域で2009年度からの3年間の事業として始められたもので、高齢者、障害者、児童の共生ケアが目指されている。各市町村から、社会福祉協議会やNPO法人、個人への委託という形をとり、それらがコーディネーターとなって、世話人を雇い入れる。）のサテライトが始められたが、社協が運営主体になるので、北地区振興会は運営のサポートをおこなっている。

北地区は月に一度のサテライト会場となり、本体は大野見支所の近くにある（「ほのほの大野見」）。中土佐町全体でセンターは3つあり、他のセンターはサテライトはやっていない。ここでのサテライトは、2010年7月から開始して、今まで5回開催している。

学校の利活用ということからしても常設にしたいし、もっとやってほしいという住民の希望もある。内容については、メニューは用意しているが、そのままやるわけではなく、参加者と相談しながら決める。好きな時に集まってもらうところ、といった感じになっている。

サテライト担当の職員は3名であり（うち福祉現場の新人が2名）、社協の

図表9 中土佐町大野見北地区振興会調査 ①



コーディネーター1名と運営委員2名の体制となっている。北地区、南地区の2ヶ所で「ほのほの大野見サテライト」をやっている。北地区としては、顔を合わせる機会になるので、引きこもり対策になっている。この空き校舎では元々月一回、モーニング喫茶をしてきたが、その時に出てこない人もサテライトには出てきている。食事提供も回数を増やしていきたい。住民の希望もある。参加者は35名であり、モーニング喫茶の時は55名になる。

当初、事業の広報は町の回覧でやっていた。ひとり暮らしには直接知らせたりしていた。今は第4月曜に固定したので、認知度も上がっているのではないかと。声かけもしている。住民は、利用者でもあり、サポーターでもある。

(3) 北地区振興会の活動内容と今後の地域づくりについて

振興会になったことで、出てこない人の把握などもしやすくなった。婦人会が合併で解散してしまった。大野見北、中央、南の3つの地区に婦人会はあったが、旧中土佐町にはなかったためである。若い人が入らないので、解散してよかったかもしれない。町から婦人会にいろいろと仕事を振られるのも負担だった。それに代わって、新しく振興会の中に女性部を作り活動をしている（今、喫茶などの活動をしているのは20人くらいであり、生け花教室を開いたり、女性消防隊を作っている）。

町の健診用紙の配布・回収もしている。地区の見守り隊活動の一環として、町の保健福祉課のサポートをしている。見守り隊の隊員は26名おり、独居に限らず、高齢者世帯や身体障害者等の見守りを行なっている。常時、声かけをするなど、だいたい集落ごとに担当を決めてみている。認知症の方に対して、薬のみを朝、夕に気をつけに行く場合もある。

年2回、町とも情報交換会をしている。ただ、保健師がなかなか来てくれないことが大きな課題となっている。大野見担当は1名いるが、母子担当もかねていて忙しく、ほとんど訪問がない。産休で5名中3名（大野見地区の人はいない）が休職しているということもある。中土佐地区の保健師に相談をしても遠いし、しかたがない。合併前は、村に1人、保健師がいて、すぐ来てくれた。

2011年1月から、あったかふれあいセンターのコーディネーター（社協職員）

と運営委員の2名で地域を回るようになった。町の地域福祉計画をつくるための地域調査の一環として取り組んでいる。さらに、行政の集落支援員による集落調査のベースがあるので、地域の状況が良く分かるようになってきた。集落支援員が居てくれることで、行政に要望が通りやすくなった。例えば防災サイレンの取り付けが実現した。地区にサイレンが付いたことで、奥地にも聞こえるようになり、どこにいても対等な扱いをしてきている気がする。保健師が定期的に来てくれればさらに良いのだが。

町への要望事項を出してもらったら、20件ほど出てきたが、50%くらい解決している。個人で言ってもなかなか実現しないが、組織で言えば行政が動いてくれる。ヘリポートはできたが、携帯電波・ブロードバンドなどは未整備である。行政や社協のバックアップがあれば、配食サービスをやりたいと考えている（潜在的ニーズが大きい）のだが。

北地区振興会各部会では、3つの部会が役割を担っている。「案練り部会」の役割は、ハード面の企画調整であり、例えばヘリポートとか、水蓮の咲く休憩所、県道の整備を町に要望した（実際、バイパス整備に繋がった）。「あすな

図表10 中土佐町大野見北地区振興会調査 ②



ろ部会」の役割は、イベントの企画であり、運動会、音楽会、文化展、成人学級の開催（認知症の学習会）などを企画してきた。「安心部会」では、ひとり暮らしの見守り活動をおこなっている（女性が多い）。

旧大野見村の生涯学習は先進的だったし、国保も安かったが、合併に際して、旧中土佐町にあわせて高くなった。基礎年金額も低すぎるし、もっと声を出していかないといけないと思っている。

産業については、野菜の出荷を女性8名で行なっている（さかき、大根、梅らっきょうなど）。高知市内の「ふるさと市場」へ、新聞配送車の帰りの便に載せてもらう。売り上げの20%が手数料（配送料、包装などの経費）である。年間1万円の売り上げがないと契約から外れることになるが、今のところない。今年の6月、町内に新しく販売施設ができるので、販路が広がるかもしれない。野菜の出荷は、結局、市場までの運搬が課題である。

移動、買い物については、コミュニティバス、デマンドバスの要望を町に出したが、実現していない。とりあえず、65歳以上は路線バス無償化ということになった。しかし、高齢者がドア・ツー・ドアで行けるようにしてほしい。例えば、ある集落はバス停まで6kmもある。町内の民間バス事業者2社との兼ね合いもあるようだが、行政として何とかしてほしい。

買い物については、あまり困っているということはないように思う。配達（個人業者、生協）、移動スーパー（町外から）や家族の協力などもあり、ある程度満たされている。

今のところ、振興会の年度計画は立てているが、中長期的なものはあまり考えていない。予算は年間150万円であり、賃金で地区内の人にほとんど払うので、自由に使える財源が少ないため、文化事業を進める上ではネックになっている。音楽会で一流の人を呼びたいが、手作りの音楽会を催し、中学校や地域の太鼓をおこなっている。

神祭については各集落で行い、6つの集落のものを集めた津野神社もある。神祭については、振興会はタッチしていない。全戸を対象にしている会であるため、各戸の宗派もあるだろうから。

様々な情報が振興会に一元化し、効率的になった。地区長が振興会に入って

いるので、横のつながりができるようになった。他の地域にはない強みだと思う。案練り部会としては、空き校舎の活用を誰がやるかが問題である。ハードは町が整備してくれても、町民の意識が支えあいへと変わっていかねばいけない。若い人に来てもらって、活用の仕方について刺激を与えてほしい。特に、家庭でみられない高齢者を今後どのようにみていくのか。あったかふれあいセンター以外の活用方法も考えていきたい（他市町村、他地域などにも視察へ行っている）。行政の集落支援員制度は非常に助かっている。同制度を実施している所は少ないが、ぜひ続けてほしい。

Ⅱ 北川村の取り組み

限界集落における高齢者の生活支援の方向を考えるうえで、北川村において高齢者の見守り活動や、住民主体のあったかふれあいセンターづくりに取り組んでいる北川村社会福祉協議会に聞き取り調査をおこなった(2011年2月23日)。以下に、その結果を示す。

(1) 北川村の地域特性と高齢者の生活問題

北川村の小規模集落には、1世帯2人(息子と高齢の母)という集落がある。草刈等の道整備は建設会社に村から有料で委託している。改良区が田役などをやってくれるが、住民だけでやるのは難しい。他にも、1世帯2人(車を運転できる)という集落がある。北川村では、すでに限界集落を通り越して、集落消滅へと向かっている地域もある(北川村は人口1470人、高齢化率38.8%)。

村内の高齢者が抱える問題としては、交通(バス)が問題である(通院、買い物などに利用される)。2月15日からデマンド運行に移行した。前日予約制で、村内どこにでも行くが、バス停までしか来ない。電話をしないと動かない仕組みであるから、電話が億劫な人には使いにくくなるなど、住民の利便性の点で変わったわけではない。バス停までが遠い集落があり、バス停まで行けない人もいるから、家の前までバスが行ってもらえるように村に要望している。

病院に行くために、年6万円のタクシーチケット(1回5千円まで)がある。住民課が実施主体であり、公共交通を利用できない人を対象にしている

が、少々足が悪いくらいでは支給されず、かなり身体に障害が出ていないと支給されない。また、バス停の近い南部地区の人はもらえない。タクシーチケット配布に関しては、外出支援の要綱が村で決まっており、かなり厳しい。その他、デマンドバスが走るまでは総務課の福祉タクシーもあったが、今はやっていない。タクシー代は、たとえば一番奥の集落から医療機関のある田野町までであれば、片道5千円以上かかってしまう。村内には診療所がなく、ずっと無医村である。したがって、病院にかかるときは近隣の町などに出て行く必要がある。社協の移動サービスは、緊急の場合に無料で行なっている（車イスの人とか、移動に困難を抱える人など）。

（2）高齢者の一人暮らし見守り活動について

民生委員11名、主任児童委員2名、そのほかに福祉協力員が56名で高齢者の見守り活動をおこなっている。福祉協力員は「みまわりさん」と呼ばれ、住民に関して気づいたことを民生委員や社協と情報交換してくれる（郵便物がたまっている、家の灯りが点かない、最近見かけない、認知症で自分の車がわからなくなった、等）。ひとり暮らし高齢者世帯を見守り、何かあったら社協や民生委員に情報が入る。月1回の民協の定例会で情報共有している。介護制度が利用者との契約になったことで、社協に情報が入りにくくなっており、ケアマネにも情報提供を求めるようにしている。

「出前相談」による生活状態の聞き取り活動は10年以上前から続けている。社協と民生委員で訪問する。住民の要望を聞いて、近隣の町までバスが行くようになったり、危険な所にフェンスをつくったりという成果につながっている。要望ができれば、その都度役場に要望し、その都度回答をもらうようにしている。言いっぱなしではダメで、具体的な対応をしてもらうことが必要である（たとえば、保健師につないだときに、対応をちゃんとしてくれるかどうか）。

現在、北川村には、駐在保健師が1名おり、各地域を訪問しているが、本人にとっては年1回の訪問を受けることになり、民生委員とみまわりさんから月1回の訪問を受けている。訪問する際は、事前に伝えておく。

その他の見守り活動としては、配食サービス（週1回、ひとり暮らし高齢者

図表11 北川村社会福祉協議会調査



や日中一人になる人が対象で、必ず声かけをする) や、あったかふれあいセンター事業の中の、介護予防サービス参加者間の相互見守りなどもおこなっている。気になる話が出てきたらその都度解消するようにしている。たとえば、最近あの人が出てこないとか、近所の人が高額な布団を買わされていた、とか。住民で見守ってくれる人がいるので、社協からも協力をお願いをしている。高速道を歩いていた認知症気味の高齢者の事例もあった(今は、あったかふれあいセンターによる見守りからデイサービスへ移行している)。高齢者アンケートに取り組んでから、村内で認知症を隠すようなことはなくなった。住民は勉強会にも良く来てくれるし、皆で気をつけている。

見守りの協力として、地元新聞社と農協は協定を結んでいる。郵便局は協定を結んでいないが、何かあれば連絡をくれる。

(3) あったかふれあいセンターについて

あったかふれあいセンター事業は北川村に合った制度なので、これまでの介護予防活動をセンター事業として位置づけており、今後も続けたい。自由参加だが、対象者には来るように仕向けている。要介護者はデイサービスでみてい

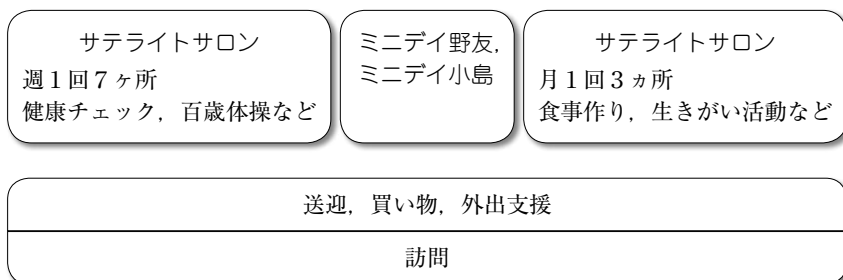
る。介護認定を受けていない人は、希望があれば原則全員受け入れる。

センターに来ることで、高齢者は変化する。表情が変わり、勇気づけられ、支えられ、認められる。互いに理解しあい、支えあうことで参加するモチベーションが上がる。人間はお互いに成長しあっている。送迎の範囲内でサテライトを置いているので、漏れる人はいない。内容は参加者の意見を聞いて決めていく。本人の希望を基本として、健康チェック、いきいき百歳体操、食事づくり、入浴等の他、送迎、買い物、外出支援などもおこなっている。参加者の家族と繋がることを意識するようにしている。

サテライトの開催頻度に差があるのは、地域の意向による。月一回で十分、あるいはそれしかできない、という地域もある。社協のコーディネーターと臨時（世話人）3名の計4名で、あったかセンター全12ヶ所を回している。ミニデイは2人体制、その他は1名で行く時もある。意思統一が大事であり、毎日ミーティングをしている。何のために手助けするのか。できるだけ、やれる人には自分でしてもらうという姿勢を大切にしている（例えば血圧計測と記録とか）。自立支援の観点から、職員が手を出し過ぎないようにしている。2011年度で、緊急雇用事業としての期間が終わるため、世話人の臨時雇用を継続するか、他の職場に斡旋するか、会長と理事の間で決めなければならない（あったかふれあいセンター事業は2012年度以降も継続予定）。

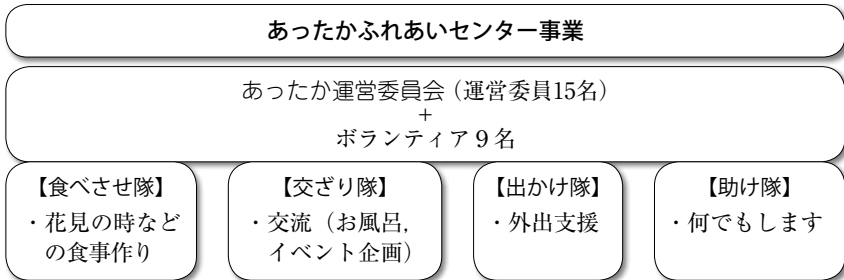
北川村のあったかふれあいセンターでは、独自に運営委員会を開催してい

図表12 北川村あったかふれあいセンター事業の概要



（出所）北川村社会福祉協議会提供資料より筆者作成

図表13 北川村あったかふれあいセンター事業運営体制



（出所）北川村社会福祉協議会提供資料より筆者作成

る。2009年8月に、15名に運営委員を委嘱した（民生委員、老人クラブ、婦人会、福祉委員など）。その他、ボランティアが9名いる。運営委員会は年3～4回くらい開催して、住民による主体的な運営を目指している。「食べさせ隊」、「交ざり隊」、「出かけ隊」など、なるべく住民で企画、運営してもらおうようにしている（80代のボランティアもいる）。ミニデイの評価事業も行なっている（ミニデイ野友15名、ミニデイ小島5名の参加者全員の観察記録をとっている）。その他、業務日誌も日々残すようにしている。

Ⅲ 土佐町相川地区の取り組み

限界集落における高齢者の生活支援の方向を考えるうえで、土佐町において、若い世代も含めて、住民主体の地域づくりに取り組んでいる土佐町相川地区の住民と社会福祉協議会に聞き取り調査をおこなった(2011年2月23日)。以下に、その結果を示す。

(1) 相川地区の地域特性

相川地区は4集落から構成される。比較的若い人が定着している。各集落の人口状況は以下の通りである。

- A集落：15世帯54人，高齢化率27.8%，1世帯あたり3.60人
- B集落：15世帯49人，高齢化率28.6%，1世帯あたり3.27人

C集落：72世帯218人，高齢化率33.9%，1世帯あたり3.03人

D集落：54世帯160人，高齢化率37.5%，1世帯あたり2.96人

土佐町全体：2038世帯4511人，高齢化率40.2%，1世帯あたり2.21人

相川地区は1世帯あたりの人数が多いのが特徴となっている（小学生は33人）。地区の仕事は、農業主体から兼業主体になってきた。相川米（韮生米，仁井田米とともに，おいしい県内三大米といわれる）の産地である。若い世代は農業に従事する他，会社等の勤め人もいる。比較的生産基盤がある地域である。他地区より田も多い。

独居老人はほとんどおらず，相川地区では1人のみである。生活保護世帯もない。家族と一緒にいるという地域性があるのかもしれない。昔から，この地域は後継者を育てる，と言われた。4集落全体を指して，「古奈川」とも呼ぶ（近くを流れる川の名前）。「相川地区」も同じ地域の範囲であり，「相川」は地理的な名前である。

（2）相川地区の地域活動

昭和40年頃には，後継者を作っていこうという意識が地域にあった。戦後から，地域の世代別集まりが始まる。15歳間隔くらいで，「おしどり会（85歳以上）」，「若あゆ会」，「こまどりの会」，「はっば会（1988年会）」，「ふれんど」，「南天会」，「やる気会（独身者）」ができてきた。おしどり会以外は，現在も活動が継続している。集まりの活動があるので，あまり孤立しないようになっていくし，地域に溶け込みやすくなっているのではないと思われる。

世代別の集まりの活動内容は，主に親睦である。飲みながら交流する。夫婦で飲みに戻ったことで始まった「おしどり会」が先駆けである。その他，日帰り旅行や忘年会・新年会，運動会は会を超えておこなう。年に4～5回おこなわれ，だいたい夫婦で参加する。地域の90%は加入している。会費は，会によって異なるが，「こまどりの会」の場合，夫婦で年2万円となっている。「やる気会」の場合，餅つきや祭りの時の焼き鳥などの事業収入があり，会費は取っていない。このような世代別の集まりは，他地区にはない。運動会，納涼会な

図表14 土佐町相川地区調査 ①



どは、住民全体でおこなう。

地域は結束力が強く、土佐町消防団のうち、古奈川分団は定員30人のところ28人いる（普通、これだけ定員を満たしている分団は他にない）。案内用の地区限定マップを作ったり、地域伝統の歌の名人(故人)の歌声を録音してスイッチを押すと地域に響き渡る装置を設置したり、という取り組みもしている（国の事業を活用しており、4集落の代表が集まって話し合い、皆で協力している）。相川地区は地域の協力が得られやすいので、新しい公共事業が優先的に回ってくる。基盤整備や下水道（農業集落排水事業）も町で最初に取り組んだ。

相川地区にある組織としては、各集落の部落会議が1～2ヶ月に1回開かれており、ほとんど全戸が参加している。4部落長会議も年に4～5回開催されている（納涼祭、運動会、地区の事業計画の検討など）。町内の他地区で、部落間で協力しているというのではない。また、部落会議の全戸参加、定期開催というのも町内他地区ではなく、相川地区の特徴になっており、いろいろな問題を話しあって、解決してゆく。

部落長会議とは別に、テーマごとに委員会がある。水利組合（相川地区で10くらいある）では、水源地の管理をおこなう。春に共同で整備する。水路が地区の発展の元になっているから、水源管理は大事にしている。高相土木委員会

図表15 土佐町相川地区調査 ②



は、安心安全のためのハード整備に関する委員会である。防災に関する要望を行政につないだり、用地交渉や防災パトロールなどもする。行政との交渉組織として機能している（土木委員長が代表として交渉する）。

農業関係の取り組みとしては、採種組合（米の粳種を作っている）があり、県下全域に販売している。もともと二期作に向いている種を作った人が地域にいる。種を作るための田があり、他品種と混じったらいけないので管理が難しい。早稲の種はほとんど富山県から、遅いのは土佐町から県下に販売している。その他、県下で2番目に農協ができたというところもあった。

部落ごとに集会所があるが、各集会所とは別に「やる気館」があり、鍵は掛けていない。誰でもいつでも使ってよい。酒類も飲んでよい。補充は誰かが気づいた時にやる。電気代等、管理費用は農協が持っている。もともと農協の木炭倉庫だった所を、農協合併によって支所がなくなるのに合わせて改修して作った。地域の上の世代から、農協を活用することと、子どもは3人、ということと言われる二世帯、三世帯が同居する割合も高い。

相川地区の見所は、棚田の景色であり、とくに名人の歌「柴刈り歌」が流れる装置がある所から見る景色が良い。旧相川小学校は、2011年にコミュニティセンターにして、集まれるような場所にしたいという話し合いを進めている。

市部との交流施設にも活用できればと考えている。行政主導ではなく、住民からの積み上げでやっていきたい。他地域との交流の意思は強い（特に女性グループ）ので、どうにかしたいと考えている（あったかふれあいセンター事業とは別に、独自の活動として）。スポーツなどを通じて、子どもも引き寄せたい。

相川地区の今後については、旧小学校を生かして、「夢と希望をもち、ずっと助けあえる地域」にしたい。また、特産品を売っていきたい。コミュニティセンターができれば、そこでも売れるだろう。肉（土佐赤牛）、焼肉のたれ・相川みそ、相川米・香り米、卵（もみじ卵）など、様々な特産品が相川地区にはある。畜産があり、その堆肥を水田で活用するという、地域内の資源循環ができていところも相川地区の良さと言える。

Ⅳ 小括

中土佐町、北川村、土佐町における高齢者の生活支援の取り組みから、今後の方向を見出しうる。いずれも、町村内の地域単位の取り組みが機能しているために、高齢住民一人ひとりの生活実態やニーズに即した地域密着型の相互支えあい活動や支援が展開できている。

中土佐町大野見北地区では、町村合併による行政サービス低下への危機感から、住民自治組織を立ち上げ、行政委託・補助や県社協補助などを活用して活動資金を確保している。北地区振興会では、住民の生活にとって切実な企画・提言をおこなう「案練り部会」、住民の生きがいにつながる文化・スポーツ・学習活動を企画する「あすなる部会」、そして独居高齢者の孤立化を防ぐ見守り活動や防犯活動をおこなう「安心部会」に住民が参画しながら、安心して生き生きと暮らせる地域づくりが進められている。女性部では、野菜の出荷により、独自の収入確保も図られている。行政サイドからも、集落支援員が地域に入っていくことにより、高齢者の生活や取り組みを様々な側面で支える役割を果たしている。

さらに、あったかふれあいセンターのサテライトがオープンしたことにより、住民どうしの交流や高齢者の居場所が生まれ、閉じこもりや孤立化の予防につながっている。他方で、地域と関われる保健師の配置や、ドア・ツー・ドアの

移動支援システムの構築など、行政支援の課題も浮かび上がっている。

北川村では、無医村で、2人集落が2つ生まれるなど、限界・消滅集落化が進む状況も見られるなかで、民生委員のパートナーとしての福祉協力員による「みまわりさん」活動、社協職員と民生委員による「出前相談」、配食サービスを通じた見守り、地元新聞社や農協による配達時の見守りなど、多様な見守り主体が高齢者の孤立化を防ぐためのネットワークを形成している。

さらに、あったかふれあいセンターがサテライト型やミニデイ型を含め、村内各地を網羅する形で高齢者の居場所を形成している。そこでの活動内容は参加者の意見を中心にして決めてゆき、過保護にならぬよう自立支援という観点が貫かれている。センターの運営のあり方についても住民中心に協議してゆくというスタイルが確立しているのは県内で独自の特徴をもっている。

訪問による個々人に対する「点」としての見守りにくわえて、高齢者が村内各地域で集まるサークルのような「円」としての相互見守り（来なかった人や近隣で心配な人が話題にのほり、保健師や社協の訪問につなげる）が重なり合いながら、高齢者の孤立化を防ぐ仕組みができあがっている。ただし、ここでも、ドア・ツー・ドアの移動支援システムの構築や、保健師による個別、具体的な対応など、行政支援の課題も浮かび上がっている。

土佐町相川地区では、生活保護世帯もなく、相川米、相川みそ、土佐赤牛、もみじ卵など様々な地域特産品を生かした地域活性化が図られている。産業面だけではなく、15歳間隔程度の世代別集まり（若あゆ会、こまどりの会、はっぱ会、ふれんど、南天会、やる気会）があることが、気兼ねなく横つながりの交流、親睦、結束を図れるソフトな地域組織を形成している。

さらに、各集落の全戸参加の部落会議や、集落間でイベントや地区の事業計画を協力して進めてゆくための4部落長会議、そしてテーマ別委員会が機能することにより、消防団の強い結束、地区マップづくりなどのユニークなアイデアの実現、新規公共事業の受け入れ、若者を巻き込んだ納涼祭の実施などにくわえて、水源地の管理、用地交渉や防災パトロール、採種組合などが安定した形で実現している。

今後は、空き校舎を活用したコミュニティセンターの実現と、それを拠点に

した地区特産品の販売促進を通じた一層の地域活性化に期待がかかっている。若い世代の流入がほとんどない反面、流出も少なく、子どもが増えつつあることも今後につながる明るい材料と言える。

おわりに

いわゆる限界集落では、さらに少人数世帯集落が漸増し、地域の孤立化が進むなかで、高齢者は鳥獣被害や移動問題、水や道路の維持管理問題などの生活問題に直面しながらも、たとえ子ども世代が戻り住むことがなくても、元気な限りは生まれ育った地域で暮らし続けたいと願っている。民生委員、保健師、社会福祉協議会職員といった地域のキーパーソンすら、ほとんど姿を見せない地域もある。合併により、行政との距離を感じている高齢者もいる。そのような状況の下でも、住民どうしで支え合えるところは支えあっていこうとする姿勢や、集落間の再編は難しくても共同事業などで協力しあったり、他地域からの移住を受け入れようとする姿勢も見られる。

今後の方向としては、中土佐町、北川村、土佐町における町村内の地域単位の取り組みに見られるように、地域内の住民どうしのつながりや結束を強め、地域組織化を図ってゆくことが、地域の内にも外にも、そして行政に対しても、地域力の存在をアピールすることになる。住民どうしのつながりの強さが、地域の中で暮らす喜びや自信につながり、地域外の人々や行政に対しても、連携と協力を惹き込む吸引力になりうる。

次稿では、これまでの論稿をふまえ、行政学、財政学、地域社会学、地域福祉学のそれぞれの立場から、限界集落で地域的に孤立した高齢者の生活支援システムのあり方を考察し、総合的な支援モデルの方向を提示したい。